

ゴルバチョフ訪日と日本の対応

東京外国語大学教授 海外事情研究所長 **中嶋 嶺 雄**



マルチ型の対日戦略を展開

新年四月に予定のゴルバチョフ・ソ連大統領の来日がいよいよ迫ってきた。ソビエト・ロシアからの最高指導者の来日は、ソ連邦が始まって以来のみならず、帝政ロシア時代以来なかったことなので、わが国にとっても大きな歴史的なイベントになるであろう。

しかも、ゴルバチョフ大統領は、単なるソ連の最高指導者ではなく、二十世紀後半の最大のスターであり、現に歴史を大きく動かしつつあるリーダーだと言わなければならぬ。そのようなゴルバチョフ大統領の訪日であるだけに、全世界が注目するであろうが、ゴルバチョフ大統領としても、訪日の失敗は許されたいだろう。なぜなら、世界のスター、ゴルバチョフ大統領も、国内では政治的・経済的および社会的に大きな危機の瀬戸際に立っているからである。

ゴルバチョフ氏を迎えるわが国としては、当然、北方領土問題の早期解決を期待しているが、日本側が、日ソ関係と言つと、すべて領土問題に絞つて、北方四島の返還が日ソ関係打開の大前提であるかのように考える出方に対して、ソ連側はかなり多面的に、数多くのイシューを領土問題とともに提起するマルチ型、クロス・イシュー型の対日外交戦略に出ているのではなからうか。

それは、従来のゴルバチョフ外交の一つのスタイルでもあったし、ソ連にとってそう簡単に処理できない領土問題を、他のイシューとリンクさせることによつて、多角的・多面的な対日外交戦略を展開しようとするのではないかと、私は予想している。

たとえば、アジア・太平洋地域の軍縮、とくに米ソ軍縮交渉でも取り残されていたアジア・太平洋地域の通常兵力削減問題や太平洋艦隊の大幅削減提案であるとか、あるいはヨーロッパにおいて成功した全欧安保体制に匹敵するようなアジア地域の安全保障システムの形成等々の問題があり得よう。これに加え、ソ連側としては、日ソ関係のいわゆる信頼醸成措置の形成を強調するであろう。

したがって、日本側としては、こうしたソ連の多角的な外交戦略に対応するシナリオを十分に練り上げておかねばならない。

一部には、ゴルバチョフ訪日のとき、すぐ領土問題が解決するのではないかと、この期待もあるようだ。この点についてはそれほど楽観するわけにはいかない。ゴルバチョフ氏の来日を契機に、日ソ関係の信頼醸成措置が形成され、良好な日ソ関係が発展し、そうした環境の中で領土問題解決の具体的な外交交渉が始まるというプロセスが、ほぼ私の見通すとおりである。

日ソ間の信頼醸成措置は、ソ連側に対して、も大いに要請されるわけで、日ソ関係が長い間悪化してきた大きな原因としてのシベリア抑留の問題や、それに先立つ第二次大戦終結

時点においての日ソ中立条約侵犯によるソ連軍の旧満州への侵攻の問題も、北方領土問題とともに存在する。私はこの三つの問題が戦後日ソ関係を悪化させた大きな原因だと考えるが、こうした日ソ関係史の諸断面に対して、歴史のペレストロイカを推進するべきであり、スターリン時代の対外政策を批判しているゴルバチョフ指導部としては、日ソ関係の過去の誤りに対しても、当然何らかの意思表示があつてしかるべきである。シベリア抑留の問題については、ソ連の学者やマスコミも最近ようやくとりあげつつあり、ソ連側の態度に変化がみられるが、この点でのゴルバチョフ訪日時のソ連政府としての意思表明を、できれば外交ルートを通じて事前にソ連側にも要請して行く必要がある。

他方、日本側としては、従来、ソ連の首脳が来そうになると、国会で「北方四島一括返還決議」などをやつて、あえてソ連側に堅いカードをみせつけたのであるが、日ソ間の外交交渉によらない限り領土は返還されないことから、この二、三カ月間、わが国としては特に慎重な対応が必要であつて、ゴルバチョフ大統領が来やすい環境をつくつて行くことが不可欠である。

どうする対ソ経済協力

そうした中で、ソ連の現状を考えたとき、特に日本はソ連との経済協力をどのように推進すべきかを本気で考えねばなるまい。現在、約六〇億米ドル前後で、さして大きくない日中貿易(百数十億—一九〇億米ドル。ちなみに日台貿易は三五〇億米ドルになっている)に比べて、さえない日ソ間の貿易はこのように拡大していくかについても、その方策を具体的に用意しておく必要がある。

いわゆるシベリア開発の問題については、すでにさまざまな議論があるけれど、ウラジオストクがソ連の太平洋地域への窓口としていよいよ開放されようとしている今日、シベリア開発を含む日ソの経済協力関係の拡大については、九〇年夏以来の湾岸危機における苦い体験に照らしても、従来と根本的に異なつたシナリオが用意されてしかるべきで、わが国の対外資源依存の多角化のためにも、もう一つ突っ込んだ議論が要請される段階に来ているといえよう。

わが国としては、以上のようない文脈の中でゴルバチョフ訪日を迎えるべきである。北方領土なしでも、こんなに繁栄してきたのであり、ソ連社会がいま危機に陥つていようとしたら、あまり領土問題のみにこだわらずに、むしろ、もっと余裕を持つて対処すべきである。そのことによつて、ゴルバチョフ大統領の面子を立てながらソ連側から譲歩をかちとるといふ迂回的な方策が必要なのであつて、当面、ゴルバチョフ氏には、なによりもまず、日本の社会と市場経済の活力とダイナミズムをよく観察して、もう一つ、その重要なといえよう。